

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇―〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

現代も資本主義である、ことを忘れまい

小林 晃 … 2

人工知能の資本主義的利用の帰結

「フィデルの功績

社会主義的人間・文化をつくった

滝野 忠 … 3

思想の種まく

原発そして国家の犯罪

原発事故被害者相双の会 … 7

―横浜の中学生の生きる勇気―差別と偏見をなくしていこう―

沖縄・京丹後・若狭の現地闘争

稲村 守 … 8

―橋田秀美さんからのメッセージ―

圧倒的多数の民衆で関電を包囲しよう! … 9

―高浜原発うごかすな! 1・22(日)関電包囲全国集会―

向坂先生、岩井さんのことども

滝野 忠 … 10

―社会通信の四十年(二)―

読者からのおたより … 12

旬刊 社会通信

NO.1230

二〇一六年十二月一五日号

二〇一六年十二月一五日発行

(毎月一日・一五日二回発行)

現代も資本主義である、ことを忘れまい

人工知能の資本主義的利用の帰結

今日、勤労国民の物の見方・考え方に、絶大な影響力を及ぼしているブルジョア・マスメディアによる報道・記事等に共通する最大の基本的特徴は、現代も資本主義である（厳密に言えば、国家独占資本主義：拙著『現代と「資本論」』時潮社、参照）ことを、まったく無視（ないし無知）していることである。これによって、勤労国民にとって、「諸悪の根源」が、経済的にも政治的にも社会的にも、基本的にすべて、一握りの独占資本による搾取と反動政治の追求・推進に、根ざしていることを見えにくくしている。一言でいえば、独占資本による思想攻撃である。戦後最悪の安倍政権が、比較的高い支持率を維持し続けているのも、ここにその大きな一因があるといつてよい。

「朝日・地球会議二〇一六―AI（人工知能）とともに生きる」と題して、一連のパネル討論や講演の特集記事（「朝日新聞」、一〇・二六、一一・九）が組まれている。

「急速に進化するAIは、人間から雇用を奪うのか。そんな問いから議論は始まった」

「日本の労働人口の49%が、将来はAIやロボットに置き換えられる可能性が高い」

「労働力が不足する農業や介護の分野で、肉体労働を代替できると期待できる」

「人工知能をコスト削減の道具として見るだけでは、企業の成長はない」

「AIに仕事を奪われないためには、代替が難しい『創造性や社会的知性』を子どもたちに身につけさせることが急務」

「AIと人間がどう協調していくか。ここで成功することが日本にとって重要だ」

「AIの技術は進んでいるのに、それに対する人間の考えが追いついていない。それが今の状況です」

「AIの活用で効率上がる。ただ、それが人間にとって幸せかどうかは別問題です。

人間が幸せになるよう、人間優先でAIをうまく使いこなす必要があります。その理念が、議論の出発点になる」云々。

ここに示されているのも、現代日本は資本主義である、ことをまったく無視した、最先端の機械をめぐる「謎」論の羅列である。対するに、マルクスの科学的機械論は、「機械装置そのもの」と、その「資本主義的使用」を峻別して、論旨明快である。

「生活手段からの労働者の『遊離』（機械装置によって駆逐された労働者）」にたいして、機械装置そのものには責任はない……機械装置の資本主義的使用と不可分な矛盾や敵対関係は、存在しない、それらは機械装置そのものからではなく、その資本主義的使用から生ずるのだから！ したがって、それ自体として見られた機械装置は、労働時間を短縮するが、資本主義的に使用されれば、労働日を延長し、それ自体としては労働を軽減するが、資本主義的に使用されれば、労働の強度を高め、それ自体としては自然力にたいする人間の勝利であるが、資本主義的に使用されれば、自然力に

よって人間を屈服し、それ自体としては生産者の富を増すが、資本主義的に使用されれば生産者を貧民化する」(『資本論』、第二分冊、四二六〜四二八)。

「機械装置そのもの」は、本来、人間と社会にとつて、有害ではなく、逆に有益である。マルクスが言うとおり、たとえば、機械は、個別的にも全社会的にも、必要な労働時間を短縮し(余暇の拡大)、労働を軽減し、生産される富を増大する、等々。そして、この本来の有益な性質が、基本的にそのまま実現される仕組みの社会が、社会主義である。機械装置の「社会主義的使用」である。ここでは、機械が、資本による搾取の物的手段であることを止めるからである。

しかし、「機械装置」が、「資本主義的に使用されれば」——資本主義のもとでは、これ以外の使用の仕方は、原則としてありえない——、すなわち、独占資本による利潤追求、したがって搾取強化の物的手段として使用されるため、首切り、雇用削減、失業、労働強化、労働日の延長など、総じて勤労国民の「窮乏化」をいっそう強める。今日、日本で、そして世界で進行している「窮乏化」の現状は、『資本論』が、一五〇年前に科学的に論証し、予言した機械論の正しさを、ますます実証している。

(経済学者・小林 晃)

フィデルの功績

社会主義的人間・文化をつくった

思想の種まけ

フィデル

フィデルがマルクスとエンゲルス、レーニン、そしてチェの元へ旅立った。二〇一六年十一月二五日、九十歳であった。

フィデル・カストロ(キューバ人民は尊敬の念をこめカストロをフィデル、コマンダント司令官と親愛の情をこめ呼び捨てにする)は一九二六年、豊かな農園主の長男として生まれた。弟は今、フィデルの跡を継ぎキューバをひっぱるラウルである。大学を卒業し弁護士へ、そして社会運動家、革命家となった。米国がいらい政権の独裁、労働者、農民の貧困から「キューバ独立」をめざした。当時の——今でもそうだけど——ラテンアメリカの諸国は、米国の軛(くびき)のもとにあった。搾取と収奪が人民を苦しめた。ラテンアメリカ諸国の人民は蜂起し、革命政権を打ちたてた。米国はすべて武力で圧殺し、血の海に沈めた。

フィデルが一九五三年十月十六日、小さな船で蜂起し、軍のモンカダ兵営を襲撃したのは、そんな時代である。

準備不足の蜂起は失敗、とらえられ裁判にかけられた。フィデルは裁判で「歴史は私に無罪を宣告するであろう」と、言論でバチスタに正面から戦いをいどんだ。正義感、勇気あふれる民族主義者フィデルがそこにある。キューバ人民はフィデルに希望を見出した。独裁者はフィデルを抹殺しなかった。だが、できなかつた。釈放され、メキシコに亡命、次の蜂起に備えた。

キューバ革命のもう一人の英雄チェ・ゲバラ―チェはアルゼンチン出身の、医者であり、バイクでラテンアメリカ諸国を旅していた―とめぐり会う。マルクスとエンゲルスにも匹敵する友情が、ラテンアメリカ解放の目的で彼らを固く結びつけた。五六年、キューバにもどりシエラ・マエストラ（山岳部）を根拠地に蜂起を準備した。ハバナ（キューバの首都）入場―キューバ革命―は一九五九年一月である。キューバの革命的変革はここに始まった。

謎 マルクス・レーニン主義の本質

フィデルは米国と仲よくしたかった。米国はフィデルに敵対した。キューバ侵攻、そして暗殺がたくられた。

フィデルは社会主義社会建設を宣言、ソ連はキューバを支援した。「キューバ危機」は、攻勢を強める社会主義世界体制と失地回復をはかる資本主義体制との対立・抗争としてあった。

米国はキューバを経済的・政治的に包囲、兵糧攻めをとりつづけた。キューバはフロリダ半島からわずか九十マイル、人口八百万の小さな国であった。一九九〇年前後にはソ連崩壊という大反動も起きた。キューバが生き延びれると考えた人は多くない。私もそうだった。なぜキューバ人民は明るく豊かで困難な情勢をもろともせず社会主義の旗を高く掲げていられるのか。フィデルは革命から今日までどのような考え、主張、思想でキューバ国民を鼓舞し続けたのか。

キューバ社会主義の前進と発展には二つの基本宣言とフィデルのマルクス・レーニン主義への考えを知る必要がある。二つの宣言は第一ハバナ宣言（一九六〇年九月二日）と第二ハバナ宣言（一九六二年二月）だ。この間、一年と半年しかたっていない。はじめの宣言では粗削りだった社会主義への必然性が、あとの宣言では『共産党宣言』を基礎にさらに豊かになっている。これはフィデルがマルクス・エンゲルスの革命理論をレーニン同様に時代に適応する力を備えていたことを示す。

革命は階級闘争という戦争だ。フィデルは軍事的天才であった。ナポレオンは「作戦計画を立てることは誰にもできる、しかし戦争をすることのできる者は少ない。なぜなら出来事と状況に応じて行動するのは真の軍事的天才でなければできない」という。フィデルは社会主義建設への戦争も知っていた。こうである。

「いうまでもなく、革命は、実験室で遂行されるものではありません。革命は、大衆の創造物であり、生きた歴史的現実の創造物であります。優れた、あらゆる面で教養の深かった思想家ホセ・マルティ（一九世紀のラテンアメリカ解放の父）は、革命は花の匂いのするものばかりではない、と述べています。歴史の理解に観念論的態度をとる人は、革命が、完成された音楽作品のように法則にしたがい少しの故障もなくすらすら発展しなければならぬと考えています。しかし、どの革命も、個々人が犯し兼ねない誤ちを（時には大きな誤ちさえも）免がれることはできません。いうまでもなく、敵は常にこれらの誤ちを利用し、あらゆる手段でそれを大きくしようとし、そして、だが歴史的現象としての革命、新しい人間社会の形態としての革命、大衆の創造

物としての革命は、その偉大さによって、その前では個人の誤りなどは影が薄くなつてしまふ事件です。誤ちを克服する度に、革命を強め、敵の手からイデオロギーの武器を叩き落とし、人類にとって共産主義思想を一段と魅力的なものとしませう。」(『カストロ 祖国か死か』 刀江書院一九六六年 一〇〇～一一頁)

フィデルはマルクス・レーニン主義を「出来事と状況に応じて行動」する術を識っていた。ソ連や東欧の晩期の指導者たちが、マルクス・レーニン主義を官房学としたのとはえらいちがいである。

『共産党宣言』

新しい年に『共産党宣言』を読み初めとする先輩、同志は少なくない。『宣言』は「小さな」本である。中味はとてつもなく深い。世界史―それも古代から現代までの―を識れば識るほど理解が深まる、己の知識が深まる程度に応じ読後の喜びが高まっていく。フィデルは古典の知識をひけらかすことはあまりしない。民族独立闘争、社会主義社会実現への闘いのなかで、マルクス、エンゲルス、レーニンの古典を読み続け、己の血や肉とした。こうである。

「ソ連は、キューバに対して非常な共感を寄せてくれ、私たちの革命に一方ならぬ称賛の気持ちをもっていました。米国のすぐ隣りのちっぽけな国が、長期間の闘いの後とはいえ、あの強大な大国に反乱することは考えられないことでした。革命の成功の可能性などまったく念頭になかったので、キューバの誰にもアドバイスひとつしませんでした。幸い私たちは誰にも何のアドバイスも求めませんでした。しかし、私たちは、マルクス、エンゲルス、レーニンやその他の思想家の著作のほとんどを読破していました。私たちはマルクス主義者と社会主義者の指摘を信頼しました。

若者特有の(ときに年配者にも見られるが)熱情と集中力で、私はこれらの書物から基本原則を貪欲に吸収していつて、自分が住んでいる社会の仕組みを理解できるようになりました。それまでは私には、社会は複雑なパズルのようなもので、納得できる説明の方法をまったく見つけられなかったのです。マルクスとエンゲルスが完成にこぎつけるまで長期間を要したかの有名な『共産党宣言』には、身震いするほどに興奮しました。それまでの人生で初めて私は真実のいくばくかを理解したのでした。」

(『フィデル・カストロ 20世紀最後の提言』現代書館、二二一～二二二頁)

「私が運動(現在のキューバ人民党の前身)に参加してわかったのは、大衆は階級の本能はもっているものの、階級意識に欠けていることでした。農民や労働者、知的職業者、中産階級の人々などは善良であり正直であり、潜在的革命派の人々です。私は自前の幾つかの構想(といっても、空想的若者の思いつく程度の代物だったけれども)をすでに作り上げていました。米国を目の前にして、キューバは何をどういうふうにやっていくべきなのか。これらの人民大衆を革命の路線へ導かれなければなりませんでした。おそらく私たちが追求してきた戦術が何らかの助けになるはずでした。もちろん、私たちはマルクス、エンゲルス、レーニンの書物を読みつづけました。モンカダ兵営を攻撃した際に、私たちはレーニンの著作の一冊を持ち帰るのをうっ

かりしてしまいました。バタイスタ政権の宣伝機関が裁判でまずはじめに喧伝（けんでん）したのは、これは金融スキャンダルで転覆させられた前政権の腐敗分子と共産主義者とが共謀した事件であるというものでした。」（同、二一四頁）

革命の本質

フィデルは『宣言』が世界観をつくった、キューバ革命はここから始まったとのべる。マルクス、エンゲルスは社会主義の必然性、それを実現する主体を明らかにした。さらに、搾取された階級の思想的、文化的成長を信頼した。フィデルはマルクスとエンゲルスのこの思想を革命から五十年、一貫して実践した。マルクス・エンゲルス・レーニンの学説を官房学とするのではなく、革命のなかで実践した。フィデルはキューバ革命の本質をずばりこう説明する。

「革命政府の最も誇れる業績とは、人々に社会主義の意識を作り出したことです。当時は手始めに、子どもたちに読み書きを教えたのですが、最初のうちは、人民の大半が識字率がゼロか半分ほどでした。こういった人々が、自由への思いから、公正への渴望から、独裁制を打倒し、このラテンアメリカに最も気高い社会主義革命を推し進め、りっぱに正義を守りぬいたのです。」

革命に勝利してわずか二年にもならない一九六一年には、教師として活動する学生たちの尽力で、およそ一〇〇万もの人々が読み書きに不自由しなくなりました。彼らは片田舎でも山岳地帯でも、辺境でも意に介さず出かけ、八〇歳を過ぎた老人にまで読み書きを教えました。その後、不断の努力で補習コースや必要な教習を続け、今日のような教育水準を達成したのです。革命は、文化と思想によって育まれ得るのです。いかなる人民も、力づくで革命的にさせることなどできません。思想を蒔く人々にとっては人民を抑圧する必要などまったくないのです。今この人々がわたされた思想・理念という武器を手に、革命の成果を取り除こうとする外敵と戦っています。」

思想・良心の種を蒔く

カストロさんゲバラさんといえはキューバ革命の象徴であるスローガン「祖国が死か」、を誰もが思い起こされるのではないのでしょうか。しかし、キューバの教育現場、そして政治組織でもっとも大事にされているのが「思想の種を播け!」「良心の種を播け!」「思想闘争は引き続き前進する!」「最後の勝利の日まで」なんです。

カストロさんの思想はマルクス、エンゲルス、レーニン、そして向坂先生と一緒に信じている。「人間を信じる」、「知は力」なんです。そしてともに成長し合っていくという確信です。この想いをキューバ人民に植えつけたんです、さらにひろめつづけていることです。カストロが播いた「思想の種」「良心の種」は革命から五十年たった今、革命戦士だった子から孫へと受け継がれ、全世界で、良心と自由、人間の尊厳の種を播く独自の活動が続けられている。そして、カストロさんの没後も続けられるにちがいありません。今はやりの言葉でいえば、これがキューバの「レガシー（革命的遺産）」なのである。

（滝野 忠）

原発そして国家の犯罪

—横浜の中学生の生きる勇氣—差別と偏見をなくしていこう—

分断され追い詰められる避難者

横浜の自主避難した中学生が「賠償金もらっているだろうから金を出せ」とか「ただでいい家にすんでいる」とかいじめにあい、それを学校も教育委員会もちゃんと対応できなかったことが、大きく問題となった。大人たちの不用意な原発避難者への偏見や差別の会話が、中学生の耳に入ったときか思えない。

「福島でたくさん死んだから自分は生きようと思う」と、勇氣を振って生きていく少年に心から声援をおくりたい。同時にもっとひどい偏見や無理解がわたしたち原発事故被害者を取り囲んでいること、被害者がどんな苦しみを強いられているかを、多くの方に知らせていかなければならない。賠償も殆どされず、避難住宅保証も来年3月で打ち切られるという、「自主避難」への国と自治体の対応も人間のやることとは思えない。勝手に避難地域を指定して線引きしておいて、この線から外は責任をおいませんといい、加害者（東電と国）のやり方からして、許せるものではない。

まるでいつまでも避難しているのが悪いかのような、6年も避難して限界だから定住しようと賠償金を使って家をたてるのが「贅沢」であるかのような風潮を放置していたら、被害者はさらに精神的に追い詰められてしまう。生きる勇氣すら失い、うつ病になり、自ら命を絶つひとはふえるばかりだ。

国家的犯罪が人間の尊厳も冒す

原発避難者の子どもたちは転校から転校となり、大人の私たちから見ても可哀そうでならなかった。靴の中に画鋲が入っていた、「放射能くさい」「そばにくるな」等々数え切れない。「避難するようになってから成績がガタ落ち」、「不登校になった」、高校に入学したがいじめに遭い退学してしまつた例もある。親も「学校へ行くなら死んだ方がましだ」と言われると退学を認めざるを得ない。いじめをしているグループ（加害者）はのうのうと学校行っている。また次のいじめをしているのかもしれない。引越した先では親も出身地をいわないようになっているという。なぜか、何を言われるか分からない。子どもが心配だからだと言う。

ふる里を追われ安住の地を求め、やつとの思いで新築したが、嫌がらせを言われて家を売りに出したという。新築した家に「賠償御殿」と落書きされた人もたくさんいる。こんなことがまかり通っているとしたら人間の尊厳に関わるだろう。

これまで培ってきた財産を全て奪われ、東電が一方的におしつける賠償金ではとても補われない。親類、友人、地域コミュニティを壊され、被害者同士が分断され、対立させられる構図が、ますます複雑化している。これは「原発の犯罪」であり国家的犯罪だ。避難者への誤解にぶつかつたら、黙って下を向くのでなく、粘り強く説得していきたい。横浜の中学生だって懸命にがんばっているのだから。

（『原発事故被害者 相双の会』No.55「二〇一六年十二月一日発行」）

沖縄・京丹後・若狭の現地闘争

―橋田秀美さんからのメッセージ―

橋田秀美さんは市民団体「No Base! 沖縄とつながる京都の会」の役員ですが、数年前まで40年来の全通労働者であり、『社会通信』紙版最後の全通（J.P.労組）釧路の運動家の文章に「本当に共感した。よかった」とおっしゃっていただき、この高江現地闘争報告会への本紙（もう紙ではないが）へのメッセージの転載を快諾してくださいました。

橋田さんは二度目の米軍ヘリパッド建設反対・沖縄・高江現地闘争に本年11月21日から27日まで一週間、テント生活しながら奮闘されました。

そして一日おいて11月29日の「米軍Xバンドリーダー基地反対・京都連絡会」が行った70数回目の京丹後現地訪問に参加された。この日は私も一緒にさせてもらい、朝、自家用車乗り合わせで京都五条大橋出発、京丹後島津地区米軍住宅前の「丹後から平和を！」看板周囲の生い茂った草取り、午後からは米軍Xバンドリーダー基地抗議行動から現地・宇川地区でのビラ配布・住民対話行動、夜帰京。

そのため11月29日夜に開催された京都市内での「高江現地行動報告会」にやむなく出席できず、左記メールを参加者に送られた。

そして明日一日がかりでビラ印刷して、明後日（12月2日）の敦賀での「もんじゅを廃炉に！」白木浜現地集会から敦賀での全国集会・デモに参加し、「若狭の家Ⅱ」に「若狭の原発を考える会」のメンバーで寝袋持参で宿泊し、40年越えの老朽原発（美浜3号機）再稼働反対ビラ配布・90数回目の若狭地域での原発反対デモに参加される。一参加者でなく、参加者への呼びかけ・とりまとめ・お世話・ビラ印刷持参など中心事務を担われます。

沖縄・高江の森↓京丹後・宇川↓若狭・敦賀美浜と現地闘争に連続参加される橋田さんは、その間も三人のお子さんとお愛い三人のお孫さんの面倒をかいがいしくみられる、闘う素敵な女性です。労働運動強化から市民運動へ、徹底して現地闘争に参加し、担われる後ろ姿を見ていると、生来横着な小生も背筋がしゃんとなってきました。

（二〇一六・一一・三〇稲村守）

一人でも高江・沖縄へ

橋田です。本日の報告会に行けなくて申し訳ありません。私が出会った沖縄の人が言ってくれた心に残る話をお知らせしておきます。

山に入るため移動する車に乗せてくれた地元のおじいさんが「森を切り開き丸い穴が開いたようなヘリパッドの写真を見たとき、心が折れてしまった。もう明日からは反対行動になど行くものかと思った。でもそんな僕に勇気をくれたのは、ぞくぞくやって来てくれる他府県の人だ。またやろう！」と奮い立たせてくれた。」と言っていました。

帰りの島ぐるみ那覇のバスに乗せていただき、横に座った沖縄の男性に「京都では、とにかく高江に人を送ろうと、旅費の補助をするため街頭宣伝でカンパを集めたり、雑誌にカンパ募集の記事を載せたりしてお金を集め、今まで延べ15人を高江に送りま

した。私たちは明日帰るけど、来週も再来週も12月に入ってからも京都から来ますよ。」と言うと、すごく驚き喜んで頂き、「ぜひ、みんなにこの話をするよ!」と言ってくれました。思ったことがあります。

山に入って工事を監視する反対行動も、向こうにしてみれば違法行為だが、違法工事をしているのは国だ。すばらしい活動だと思います。山に入らずゲート前で座り込み抗議する行動もすばらしい。どちらも非暴力で闘われています。両輪で闘われているのだと思います。

そして私が一人行って何になるんだ、と思っている人があれば、それは違います。小さくても無力ではない。しっかり届いています。今が山場です。人が多ければ機動隊も手出しできません。一人でも高江に向かわれることを強く訴えます。

私は今日は丹後のXバンドリーダー基地反対の個別訪問行動に行きます。以前から決めていたのですみません。今日の高江報告会が成功し、また高江に行こう、という人が沢山出てきていただけることを願っています。(二月二十九日、京都・橋田 秀美)

圧倒的多数の民衆で関電を包囲しよう!

—高浜原発うごかすな! 1・22(日)関電包囲全国集会—

高浜原発再稼働阻止の運動は正念場を迎えようとしています。大阪高裁で行われている3・4号機運転差止め大津地裁仮処分決定に対する抗告審は、12月26日に審理を終了し、2月にも決定が出されようとしています。もし、逆転判決が出れば、2月中の再稼働の可能性があります。

関電は、早急に結論を得て、再稼働に漕ぎ着けたいと躍起です。これを許せば、関電は、世界的に見ても老朽な40年越え原発の再稼働をさらに加速するでしょう。また、原子力規制委員会、政府、電力会社も、破綻した「もんじゅ」だけを切り捨て、全原発のプルサーマル化など、さらなる原発推進に暴走するでしょう。廃炉費用の国民負担も増加させるでしょう。

敢然と「原発 NO!」の声を関電に突きつけ、大阪高裁の決定前に、「脱原発・反原発」の民意を司法に示しましょう! 今まで原発電気を消費してきた関西からも「原発電気はいらない!」の大きなうねりを創りだし、原発立地の運動と連帯して、原発全廃を勝ち取りましょう!

◇出発前集会と前段のデモ

とき 2017年1月22日(日) 14時 ※デモ出発14時30時
ところ 中之島公園・女性像前(大阪市役所の南側)

デモは、西梅田公園が終点。15時15頃、到着予定
その後、三々五々、関電本店前に移動。歩5〜10分

◇呼びかけ

原子力発電に反対する福井県民会議、さいなら原発・びわこネットワーク、
さよなら原発神戸アクション、さよなら原発なら県ネット、
ストップ・ザ・もんじゅ、若狭の原発を考える会

◇連絡先

木原壮林(若狭の原発を考える会) 電話 090-1965-7102 Fax 075-501-7102
E-mail kiharas-chem@zeus.conet.ne.jp

◇賛同団体

個人 募集中! 連絡は、右記まで

向坂先生、岩井さんのことども

— 社会通信の四十年 — (二)

向坂先生とのお付き合いは一九六九年から亡くなられた一九八五年までの一六年間。楽しい思い出、穴があったら入ってしまいたい思い出は数えきれません。入塾後、先生は、不勉強かつ怠け心を見抜かれていたからでしょう。「近くに住め」と向坂宅まで徒歩三分の安下宿に住まうことになりました。向坂塾をよく知る人には「桂ですか」と聞かれました。桂（別棟、元の住人は茶室として使用していたらしい）には地方から上京した若者が、「社会主義社会の生活」をされておりました。

そのオンボロ下宿から東京八重洲の岩井事務所に通勤です。国労会館地下に印刷屋がありました。つれ合いとの出会いです。国鉄労働組合や岩井事務所等の文書や書籍を印字する邦文タイピスト（今は消えてなくなった職業）として働いていたのです。

結婚時、「人は住居が大事、半日は住まう、少しは高くてもゆったりしたとこに住め。金がなければ援助する」。そうして先生が手配してくださったのが、「カサ・パシフィカ」。当時の自民党大物政治家の松村謙三氏の娘が建てたばかりの二階建てのアパート。先生宅からは三〇メートルでした。東京生活の始まりです。向坂先生没は一九八五年ですから、先生との交流は十六年、先生が亡くなり三十二年、岩井さんは二十年、今では二人の社会主義者を知る人は少なくなりました。思い出はこの他山のようにあります。

岩井事務所での仕事は、秘書的なものから、国際労研での定例研究会の準備と月刊誌『国際労働運動』の発行でした。第一号は、一九七一年七月二〇日発行、その内容は定例研究会報告第一回と二回の記録です。テーマは岩井さんの「日本労働運動の現状とその課題」、そして御園生等先生（東洋大学）の「日本資本主義の現段階と資本の輸出」、資料には国際労働運動の動向としてソ連週刊誌『新時代』からの翻訳『労働組合と政治』を載せています。末尾には定款、当面の目的と活動、そして人事のせられてあります。役員は理事十三、監事二、運営委員十四の二九名。存命なのはただ一人であるかです。四十六年の年月の重みです。

定例研究会は仕事です。仕事以外の活動にも精を出しました。国労本部の隣に新幹線支部、車掌所分会がありました。役員の皆さん中心に岩井さんを訪ね、知恵をもらおうと考える人が少なくありませんでした。岩井事務所は彼らのたまり場になったのです。岩井事務所の隣り部屋は国労調査部の小会議室、詰めれば二十人近くは入れました。そうこうしているうちに『資本論研究会』をやろう。

「講師を誰に頼む」となり、向坂先生にお願いです。快く引き受けていただき、国労本部会議室を拝借し、月一回の学習会が始まりました。幹事役は私です。多い時は五十人超が、千代田の社青同、社会党、国労関係者を中心に参加しました。お付きは先生の秘書 和氣誠さんです。和氣さんが所要のときは、私が同行です。送迎の時、こんなこともありました。私は二六歳。先生をお護りするのじゃなく、スタスタと先に電車に乗り込んだ。先生はどこと振り返ると後に…。ドアは無情でした。しまった、

どちった、生き別れです。先生は「滝野君はヒドイよ」なんていわれたこともありました。

一年くらいして、演劇、ロシア語好きのマドンナが入局、筆塚真理子さんです。マドンナ目当てに国労新幹線の若者が押しかける。事務所はさらにぎやかになりました。マドンナは独学でロシア語をモノにし、退局後、通訳として活躍されておりましたが、病に倒れてしまいました。筆塚さんと一緒に仕事をされたのが松野菊美さん。彼女も独学で中国語をモノにし、岩井さんの没後、岩井さんの中国事業を継承する旅行者を立ち上げたのです。

向坂先生、たいへん多忙でいらした。鷺宮の自宅では週一回の『宣言』『資本論』、専従者中心の『レーニン研』もありました。国労反合研誕生は一九七〇年です。先生は灰原さんとともに必ず出席され、午前零時ちかくまでじつと耳を傾けられました。帰る時には『勉強になった』と。執筆活動もたいへん活発でした。

『資本論解説』（労働大学刊）にとりくまれておりましたし、『社会主義』『まなぶ』『月刊労働組合』他商業紙に論文、随想を次から次へと執筆されておりました。もともと興味と関心をもって読んだのは『国労文化』の連載でした。『国労文化』の目玉は共産党系と目されていた哲学者の古在由重さんと先生の随想でした。隔月で定期的に書かれていたように記憶してあります。「書くテーマがよくあるな」と感心するくらいに、心を耕す論稿を発表されておりました。当時、この雑誌の編集を担当されていた国労本部教宣部のN氏は、「古在先生は向坂先生の知識の広さと深さに感心されておりますよ」と、聞いたことがあります。

かくいう私も、岩井さんと相談のうえ、向坂先生の講演、論文を『月刊国際労働運動』に寄せていただいたものです。

出勤には先生宅の前を通ります。先生の日課は朝の散歩です。十時過ぎての出勤時には「雷」です。「滝野君、重役出勤だな」なんて。先生はおやすみになるのは遅かったです。夕食後、書齋へ。そして茶の間の雑談。それにはお手伝いさんも加わっておられました。先生は入浴してからのおやすみです。床につかれるのは深夜に近かったと記憶しています。

先生からは毎晩のように電話です。「話があるから来い」と。いっぱいやり終わってからの電話にはおうじようしました。先生は酒は一滴もおやりになりません。甘いものは大好きです。とりわけ好まれたのは麩まんじゅう、とくに京都「麩嘉」のです。長崎・福砂屋のカステラもそうでした。

先生が国労本部の資本論研究会に参加された時、終了後、若い仲間とつれだつて喫茶店でコーヒーです。先生は「純喫茶なんて、不潔なものはない」といいながら、コーヒーカップにあふれるほどの砂糖を注入、私たちは「先生はコーヒーより砂糖を飲んでる」と、先生を横目に目配せし合った記憶がよみがえります。

岩井さんの事務所は約三年で退局し、あちらこちらへ修行しながら『社会通信』発刊となったのは一九七七年半ばのことでした。社会党左派前進に危機感をもった右派

の労働組合や社会党内右派の輩が、社会主義協会批判を始めた時です。烏が鳴かない日はあっても、新聞に協会批判がのらない日は一日もありませんでした。

そうした時、向坂先生が「滝野君、情報誌を出せ」。先生は師匠です。師匠の命令には逆らえません。こうして『社会通信』は始まったのです。(つづく)

◇読者からのおたより◇

調べたい 母校(高校)創立140周年記念の美術展が、松本市美術館でありました。そこには、母校の第一棟の全景を描いた絵が、展示されました。松本昇作のものでした。松本昇、知っておられますか。太牟田出身、松本高等女学校の美術教師をされていました。向坂先生が、戦後松本へ来て、『資本論』翻訳や、長い論文は松本で書いたというのですが、そのきつかを作ったのは、百瀬嘉郎さんと共に、松本昇画伯でした。この辺、もう少し調べてみたくなりました。(松本・中澤秀行)

「一九八七年の地獄」の始まり お久し振りに御誌に接することができました。拝読で心が安定します。滝野さんご夫妻と中心の方々には深く敬意を捧げます。JR北海道の状況は(一九八七年の地獄)の始まりを、倍に膨らんだ「赤字一六兆円」はオンブお化けとなった。そんな厳しい中、県内外で私を支えて下さった労組や活動家の方々の運動の重さを痛感しています。その運動が今、私達9条の会や、婦人会議の仲間3人との毎月の(19日行動)の源泉となっています。行動後は三人で腰を伸ばしてお茶。他への参加報告やピラマキ等の源泉としております。(柏市・柳田祥子)

JR北海道 国鉄「分割」民営化の末路ツケ11帰結とはいえず:「JR北海道にそのことが集中的にあらわれています。当時の政府・独占資本・自民党はじめ「国鉄「分民化」を推進した多数の勢力組織は今においても重大な責任を負わなければなりません。「十三区間単独で維持困難」として、まさに今本当に「正念場」の事態を迎えて、どうするか、どうしていくのか、その闘うべき「進路・針路」が重要になってきています。国鉄労働組合はじめ、心あるJR労働者、JR関係・関連労働者を含めた問題意識の共有、北海道民はもとより全国の仲間との連携をどうしていくのか、今こそ求められているのではないかと深く考えています。(札幌・元国鉄労働者・松里福慈)

半年間の取り組み 「会派新政」に所属し、10人の仲間と勉強会や議論を行ってきました。常任委員会「厚生」、特別委員会「交通政策」「議会広報公聴」に所属し、委員会審議や調査などを行ってきました。地元弁護士などの協力を得て、無料相談を始めました。6月9月の定例会とも一般質問を行いました。2回とも質問を行ったのは、新人議員9人中3人です。「柏崎刈羽原発を再稼働させない自治体議員・活動家ネットワーク」に参加し、避難計画などの勉強をはじめました。農業農村議員連盟に加盟し、地元農家の視察や雪室施設の見学など、基幹産業である農業の勉強に励んでいます。地域の課題についてみなさんと一緒に考え、市はじめ関係当局につないできました。危険箇所改良や速度制限、道路改良、消雪施設の要望、松クイ虫防除による人体への影響、大雨による水害対策等取り組んできました。みなさんからいただいた力を背に、これからもみなさんと共に、「安心して、いきいきと暮らせるまち」をつくるため努力していきます。(上越市議・牧田まさき)

思い出の郵便ポスト 今回の思い出の郵便ポストは新潟県阿賀町役場前の丸型ポストです。今年11月に撮影しました。ガソリンスタンド前を通過したのは新潟県の銘酒「麒麟山」の車。うまく撮れました。今年思いもよらない(想定外?)初雪に見舞われ、りんごの収穫は11月一杯には終わりそうにありません。加えて昨年よりも実がたくさんついているようです。朝7時の朝食後から21時か22時まで、作業の連続です。(長野県飯綱町・山浦隆芳)

カンパを送ります いつも社会通信ありがとうございます。また、明日付でわずかながらカンパを送金させていただきました。お役立て下さい。まずは連絡まで。(大分・南晃)

老体にムチ打って いつもご苦勞様です。預り金 7000円については、カンパいたします。よろしく取り計らいください。残り少ない健康寿命まで、社会の進歩に少しでも貢献できればと老体にムチ打って頑張っているつもりです。お体を「ご自愛ください」。(奈良・堀田棟光)

カンパ 返信が遅くなり申し訳ありません。中途半端に残金が残ってしまい、お手数をおかけしました。カンパのつもりでおりましたので、返金はいりません。(帯広・齊藤孝)

これからも わざわざご連絡いただき、ありがとうございます。私も三〇年に及ぶ愛読者です。いつも勉強させていただいております。大変失礼かとおもいますが、残金については、結構ですので、よろしくお願いいたします。今後とも、楽しみにしております。(鹿兒島・大森 忍)